地方町長まちづくり政策鼎談

町の政策と図書館の役割――有田町・みやこ町の展望

松尾佳昭　佐賀県・有田町長
内田直志　福岡県・みやこ町長
司会　糸賀雅児

近年、図書館はまちづくりの拠点として大きな役割を担っている。実際に地方自治体の現役首長は、図書館とまちの関係をどのように考えているのか。図書館政策に最も精通する慶應義塾大学名誉教授の糸賀雅児先生をファシリテーターにお迎えして、佐賀県有田町の松尾佳昭町長と福岡県みやこ町の内田直志町長が、町の特色と重要政策、ご自身と図書館の関わりや、これからのまちの図書館の可能性について意見を交わしていただいた。

松尾佳昭
MATSUO Yoshiaki

佐賀県有田町長。1973年生まれ、佐賀県有田町出身。有田中学校、伊万里高校、福岡大学法学部卒業。有田焼ブランドメーカー勤務、参院議員秘書などを経て、2006年の有田町議選で初当選し、連続3選を果たす。2018年に有田町長に就任。現在2期7年目。

内田直志
UCHIDA Tadashi

福岡県みやこ町長。昭和53年奈良県生まれ。福岡市・太宰府市で育ち、大学院修了後は関東のプラントエンジニアリング会社に入社。両親の故郷みやこ町の過疎化を憂い、松下政経塾で政治と経営を学び政治家へ転身。2013年に家族とみやこ町へ移住。町議を経て令和4年町長に就任。「まちづくり」「居場所づくり」「フレイル予防」をテーマに掲げ、みやこ町の活性化に取り組む。

糸賀雅児
ITOGA Masaru

慶應義塾大学名誉教授。東京大学大学院教育学研究科修了。2017年に慶應義塾大学文学部を選択定年により退職。この間、中央教育審議会生涯学習分科会 臨時委員、文部科学省これからの図書館の在り方検討協力者会議 副主査、文化庁文化審議会著作権分科会専門委員、経済産業省国際標準化機構（ISO）国内対策委員会TC46（情報・ドキュメンテーション）SC8（統計）主査、（公社）日本図書館協会町村図書館活動推進委員会委員長、同協会認定司書事業委員会委員長、同協会認定司書審査会長などを歴任。

主な著書『図書館による町村ルネサンスLプラン21 21世紀の町村図書館振興をめざす政策提言』日本図書館協会、2001（編著）、『図書館制度・経営論』樹村房、2013（薬袋秀樹らと共編著）、『地方自治と図書館――「知の地域づくり」を地域再生の切り札に』勁草書房、2016（片山善博と共著）など。

糸賀　今回は、『Cul De La』第7号の企画として、お二人の町長と鼎談を進めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。お二人の町長とお会いするのは初めてです。みやこ町には先週の水曜日に訪問しました。有田町には過去に何度か足を運んだことがあります。ただ、町長とお会いするのは今回が初めてですので、簡単に自己紹介をさせていただいた後、お二人にも自己紹介や町のPRをお願いしたいと思います。

自己紹介とまちの概要

糸賀　私は慶應義塾大学の文学部で図書館情報学を専門とし、長年にわたり司書の養成にあたってまいりました。慶應大学には33年間勤めまして、多くの司書を育てたつもりです。専門は図書館情報学の中でも図書館経営論や図書館政策論で、全国の図書館づくりに関わる機会も多くありました。また、文部科学省の中央教育審議会（生涯学習分科会）[1]の委員を務めましたし、日本図書館協会の活動にもずいぶん関わってきました。

現在は大学を退職し、花井さんとのお付き合いの中で、図書館に関わる仕事を続けています。現在は日本図書館協会で「認定司書制度[2]」といって、全国で優れた司書を認定する制度を発足させまして、現在は審査会長を務めています。有田町やみやこ町からも認定されるような司書をぜひ育てていただきたいと思います。実はこの認定司書については、『Cul De La』の前号（第6号）でも特集を組んでいただきました[3]。

それでは、まずお二人の町長に、それぞれの町との関わりや簡単な経歴、そして「わが町PR」として、町を紹介していただきたいと思います。事前に調べたところ、有田町の人口は約1万8,700人、みやこ町は約1万7,700人と、ほぼ同じ規模です。行政面積は南北に長いみやこ町の方が広く、有田町の約2倍ですが、一般会計の予算規模は有田町が約130億円、みやこ町が約140億円と、ほぼ同水準です。九州の西と東に位置しながらも、多くの共通点を持つ町です。こうした点も踏まえ、まずは有田町の松尾町長からお話しください。

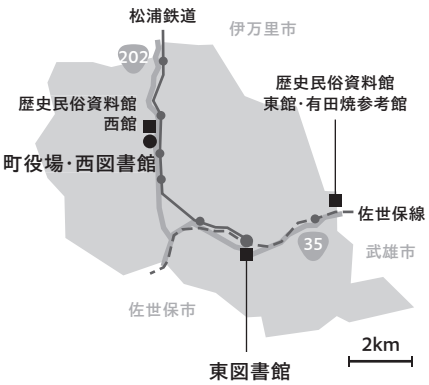
松尾　ありがとうございます。佐賀県有田町長の松尾佳昭です。有田町は2006（平成18）年に、焼き物の町として知られる旧有田町と、旧西有田町が合併し、新たな有田町として誕生しました。

有田町といえば、やはり「焼き物」のイメージが強いかと思います。しかし、実際に訪れていただくと、多くの方が自然が豊かで、自然が近いと驚かれます。町全体が360度パノラマで山に囲まれており、その魅力があると思っております。豊かな自然を活かした農業も盛んです。焼き物の歴史は、陶磁器の原料となる石がまさにこの自然の中、この地で発見されたことから始まり、400年続く有田焼と窯業の町として成り立っています。ただ、有田焼があまりにも有名なため、ほかの魅力がなかなか目立たないという悩みもありますね。

みやこ町の内田町長とは、「若手町村長会・九州[4]」を通じて何度かお会いし、お話しする機会がありました。今回、理事長の花井さんからこの鼎談の話をいただき、ぜひ参加させていただきたいと思いました。実は花井さんが長野県の「まちとしょテラソ（小布施町立図書館）[5]」に関わっておられた時、私もそこを訪ねたことがあります。当時、私はまだ議員で、文教厚生常任委員会に所属していました。有田町の隣には、民間と連携した図書館で話題となった武雄[6]や公共図書館の運営に力を入れている伊万里市[7]があります。そうした環境の中で、「有田町も文化の町として図書館をどう活かしていくべきか」と考え、小布施までおしかけて行った次第です。私自身、文化の町として図書館を非常に

佐賀県有田町

面積	65.85㎢
人口	約18,780人
予算規模	約130億円



上：有田焼　中：竜門峡（有田町 広瀬山）　下：棚田（有田町 岳地区）

重視しています。図書館を通したまちづくりにも非常に興味がありまして、花井さんと交流を深めながら関係を続けていきたいと考えています。合併により、町内には2つの図書館が存在しますが、「これをひとつに統合するべきか、それともそれぞれを活かすべきか」といった議論が続いています。どちらの考えにも一理ありますが、いずれにしても、図書館をどのように発展させていくかは、町の未来を考える上で大きな課題です。今回の鼎談を通じて、図書館を核としたまちづくりについて改めて考え、思いを共有する学びの機会だと思っています。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

糸賀　松尾町長、ありがとうございます。私も有田町には2度ほど訪れたことがあります。現在の図書館は、合併前にそれぞれの町で設立されたものだと思いますが、特に東図書館はやや老朽化が進んでいるようですね。

松尾　ありがとうございます。そうなんです。あの建物は耐震補強がされていないため、解体の話も出ています。まさに今後の図書館の在り方を考えるうえで、今回の鼎談はグッドタイミングでした。

糸賀　なるほど。一方で、西図書館は役場庁舎の2階にありますが、建物の構造が少し複雑で、渡り廊下のような場所を通らなければならないのですね。規模的にも少し小さい印象を受けました。

松尾　合併前、西有田の方が古い図書館しかなかったため、町民ホールという形で作られた経緯があります。しかし、合併の行方が不透明だったこともあり、図書館の設計自体がやや後付けのような形になってしまいました。建物自体は美術館のようだと評価をいただくこともありますが、実際には使い勝手が悪く、役場としての機能も十分に考慮されていないのです。その2つの図書館をどうしていくかが、今後の有田町における大きなテーマかなと思っています。

糸賀　この鼎談が、松尾町長のカラーを出した図書館づくりの機会になればと思います。お待たせしました。内田町長、自己紹介とみやこ町についてのPRをお願いいたします。

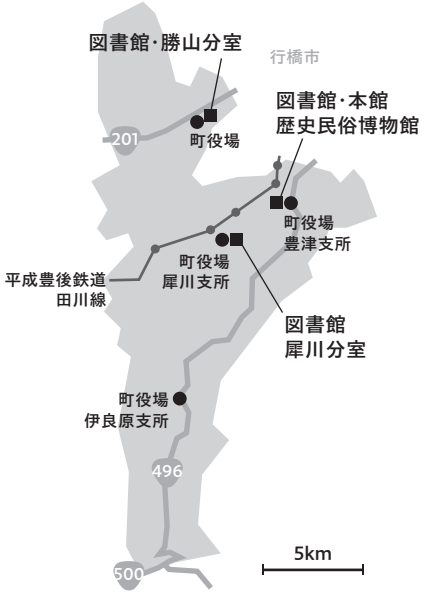
内田　松尾町長、ご無沙汰しております。私の生まれは奈良県ですが、福岡市の東区で育ち、その後、太宰府市で大学まで過ごしました。その後、関東へ移り、2013年に家族と共にみやこ町へ移住しました。出身地ではありませんが、両親のふるさとがみやこ町であり、私は内田家の長男ということもあって、いつかは戻らなければいけないというのは、子どもの頃から心にありました。それによってこちらに来たのが大きな流れです。それまではサラリーマンとして横浜でエンジニアをしていました。しかし、みやこ町の過疎化が進んでいることはわかっていましたので、定年後に戻ったとしても、たとえば自分の父親の集落などはもうなくなっているのではないか、という不安がありました。そして、この問題はみやこ町だけではなく、全国の大きな課題だということ、当時、市町村の半数以上が国から過疎指定を受けている[8]ことを知って、それで会社を飛び出したのです。一度、神奈川県にある松下政経塾[9]で政治と経営を学んだ後、父母（ちちはは）のふるさとであるみやこ町に来ました。もともと私は理系の人間で、学部・学科もそうでしたし、仕事もエンジニアでした。まちづくりとは畑違いといえば畑違いなのですが、思い一本で今日（こんにち）までやってきました。

みやこ町は有田町と同じく、2006（平成18）年に3つの町――豊津町・犀川町・勝山町が合併して誕生しました。合併当時の人口は2万人を超えていましたが、現在は1万7,700人。年間330～360人ほどのペースで減少しており、過疎化が進んでいる状況です。さらに「消滅可能性都市[10]」として名指しされたこともあり、大変残念だと考えています。しかし、日本全体で人口が減っている以上、それはある種受け止めつつ、「どうやって持続可能なまちを作るのか」「これからの時代にふさわしい豊かな暮らしとは何か」を、住民の皆さんとともに考えながら、まちづくりをしなければならないと考えています。

みやこ町は福岡県の東部に位置しています。福岡県というと福岡市が有名なので、華やかに報道されるのですが、大動脈[11]は西を通ってしまったものですから、これも過疎化の一因ではないかと考えています。ようやく最近になって高速道路がつながった状況です。ただ、歴史を

福岡県みやこ町

面積	151.3㎢
人口	約17,650人
予算規模	約140億円



上：崎山のひまわり　中：生立八幡神幸祭（みやこ町 生立）
下左：銘酒 九州菊　下右：豊前国分寺三重塔（みやこ町 国分）

遡ると、みやこ町はかつて九州の玄関口でした。中央政権と九州を結ぶ交通の要所であり、古くから人の往来があったため、各時代の歴史的な痕跡が色濃く残る町でもあります。歴史的な資料が非常に多く、小さい町ながら町単独で歴史民俗博物館[12]を運営しています。しかし、資料が多すぎて「どこにスポットを当てるべきか」が定まらないという悩みもあります。ありすぎるがゆえにとがれない、というジレンマを抱えている町です。産業としては、江戸時代から続く農林業が主軸となっています。しかし近年は、隣接する苅田町が海を埋め立てて大規模な工業地帯になりまして、自動車関連企業が進出してきました。その影響で、一時期はみやこ町にも

関連企業が立地しました。売上高の面ではそういった工場の売り上げが最も大きいのですが、従事者の数では兼業農家を含む農業従事者が最も多い状況です。福岡県内には60の市町村がありますが、みやこ町は米作りにおいては県内7位にランクインする「米どころ」でもあります。

みやこ町は自然にも恵まれています。南には耶馬溪が広がり、さらに修験道の聖地である英彦山も抱えています。豊かな自然と歴史、文化が共存する町です。

糸賀　ありがとうございました。みやこ町の歴史や文化が豊かだということがよくわかりました。みやこ町には歴史民俗博物館がありますし、一方、有田町には歴史民俗資料館[13]がありますね。図書館から歩いて行ける距離にあったので、私も訪れました。みやこ町は、小宮豊隆[14]の出身地でもあり、夏目漱石に関する資料が数多く保存されていました。もっと早くに訪れるべきでした。図書館の方も、なかなかいい施設ですね。今後の活用次第では、まちづくりの大きな拠点になっていく可能性を感じました。今日も今後の図書館のあり方についてお話を伺っていきますが、あの図書館は、生涯学習や地域のまちおこしの中心となりうる施設だと思います。また、館長さんや係長さんにもお世話になりましたが、お二人とも熱心で、図書館の運営に尽力されていることがよくわかりました。有田町とみやこ町は、それぞれ異なる特徴を持ちながらも、規模や、図書館・歴史資料館・歴史博物館を有している点など、多くの共通点があります。これまで培われてきた地域の伝統や文化を残しつつ、少子高齢化にどのように向き合っていくべきか、両町が抱える課題には重なる部分も多いのではないかと感じています。

では、ここから話題を各町の政策へと移していきたいと思います。町長としての任期にはそれぞれ違いがありますが、現在どのような政策や事業に重点を置いているのか、お話を伺いたいと思います。引き続き、松尾町長にお願いいたします。

まちの重要政策方針について

松尾　はい。私は現在2期目の7年目になります。町長に就任した当初、有田町は窯業と兼業農家の2つの町だったので「食と器のハーモニー」のようなイメージを持っていました。有田町は兼業農家が多いことが特徴です。また、農業ではブロイラー関連が約7割、牛や鶏の飼育が中心ですが、豚の飼育もあります。作物に関しては、米作りが主流で、果樹ではシャインマスカットや巨峰、金柑、玉ねぎ、アスパラガス、イチゴなどもございます。それぞれの品目ごとに生産者の部会があり、活動を続けていますが、農業を町の主産業にするというのは難しい状況です。有田町は山間地域ですので、農業政策を打とうとしてもなかなか難しいという現実を感じているところであります。

一方、窯業についても、人口減少の影響を強く受けています。「人口」という言葉が示すように、「人の口」が減っていく中で、日本国内市場だけでは窯業は成り立っていきませんので、今後は、改めて海外市場に目を向ける必要があると考えています。ただ、私は旧有田町の出身なので、「焼き物ばかりに力を入れている」というイメージを持たれがちです。そのため、農業と窯業のバランスをどのように取っていくかが、難しい課題のひとつになっています。また、2006（平成18）年の合併後、翌年には佐賀県と一緒に企業団地を開発する構想が持ち上がりました。すでに土地は購入していたものの、造成が進んでいないという案件がありましたので、町長に就任した当初、私は「この企業団地をすぐに開発しよう」と考えていました。しかし、30ヘクタールという広大な敷地を整備するには、それに見合う企業誘致が必要になります。

2007（平成19）年には、自動車部品メーカーのタカタさんが進出を決めましたが、当時は人口減少がここまで深刻になるとは予想していませんでしたので、私自身も1年間かけて情報収集を行いましたが、その間に時代の変化を感じるようになりました。そこにコロナ禍が訪れ、3年間はほとんど動けない状況が続きました。そうした中で、「今後、製造業の工場誘致だけが町の発展の道ではないのではないか」と考えるようになりました。人口が減少していく中で、町として何ができるのかを模索し、ICT・IT・AI関連の企業など、小規模な企業誘致に力を入れるようになりました。その取り組みが、ようやく成果を見せ始めているところです。

また、文化の分野でも、さまざまな取り組みを進めていきたいと考えています。しかし、文化というのは人それぞれの感じ方があり、一律の政策を打ち出すのが難しい面もあります。企業でいうところのメセナ事業のように、町と文化の双方が発展できるような仕組みを作れればと考えています。さらに、後ほど詳しくお話ししますが、教育にも力を入れており、特に「STEAM教育[15]」や「本物の教育」を推進しているところです。

糸賀　はい、ありがとうございました。事前に花井さんからも資料をいただき、私自身も有田町のホームページを拝見しましたが、「持続可能なまちづくり」に力を入れているのが印象的でした。SDGsをはじめ、最近のキーワードであるWell-Being[16]やESG経営[17]にも積極的に取り組んでいらっしゃるようですね。

松尾　そうですね。有田町は400年の歴史を持つ焼き物の町です。焼き物は1300度の高温で焼成しますので、どうしても火を使わざるを得ません。社会全体が「炭素排出ゼロ」を求める流れになっていますが、私たちにとって焼き物は命そのものなので、この文化を絶やすことはできません。では代わりに何ができるのか――

みやこ町
歴史民俗博物館
上：外観
下：小宮豊隆と夏目漱石の交流や
研究活動を紹介する展示

ということで、SDGsにも積極的に取り組んでいます。

SDGsというと難しく感じる方もいましたので、私は、おばあちゃんから怒られないことをする――つまり、「ものを大切にしなさい」「年上を敬いなさい」といった基本的な価値観の延長線上にあるのではないかと考えています。そうした中で、九州大学の馬奈木先生[18]とのご縁をいただき、有田町全体のESG経営分析を行ってもらいました。今後の町の管理運営や海外戦略に活かし、販売信用の強力なツールとして活用することを模索しています。ESGに関しては私の肝いりの政策ですので、職員がまだ十分についてきていない部分もありますけれども、確実に進めていきたいと考えています。

糸賀　なるほど。有田町の歴史ある窯業はどうしても火を使うということで、現代の脱炭素社会との整合性をどのように取るかは、悩ましい問題でしょうね。ぜひ、自然との調和という方向性で持続可能な形を目指していただきたいと思います。この点については、みやこ町も似たような課題を抱えているのではないでしょうか。お待たせしました、内田町長。みやこ町での重点事業についてお話しいただけますでしょうか。よろしくお願いします。

内田　はい。先ほど自己紹介の中でもお話ししましたが、みやこ町は2006（平成18）年の全国的な「平成の大合併」の流れの中で誕生しました。その背景にあったのは「コストカット」の時代の流れだったと思います。確かに、当時の文脈では必要なことだったと思いますけれども、しかし、私はそのコストカットの流れがいまだに続き、行き過ぎているのではないかと感じています。施設の統廃合についても、合併したから、重複する施設は減らさなければならないという考えはわかります。ただ、度を越えていませんか、というのが私の問題意識です。さらに、町の公共施設は昭和40～50年代に建設されたものが多く、一斉に老朽化し、寿命を迎えつつあります。みやこ町にはいま、大小合わせて180近くの公共施設がありますが、これらを今後どうしていくのか。単純にすべて同じ場所に、同じように建て替えるのか。それでは、持続可能なまちづくりとは言えません。

みやこ町は今、ある程度財務状況が良くなっています。今後は当然、無駄を省きつつ、未来を見据えたまちづくりへの投資を行わなければいけない。この方針のもと、就任当初からグランドデザイン（町の設計図）を策定する取り組みを進めてきました。町職員だけでなく、外部の専門家も交えたチームを組んで進めています。このグランドデザインには、大きく分けてハード面とソフト面の2つの柱があります。1つ目は「生活拠点の整備」です。人口が減少していく中でも、ここに行けばくらしが成り立ちますよ、という拠点を各地区に設けることが不可欠です。みやこ町は大変広く、地形も複雑で、旧3町（豊津・犀川・勝山）ごとに山や丘で分断されているため、それぞれの地域に最低1カ所ずつ、生活拠点を設ける方針です。

2つ目は「都市計画・土地利用の見直し」です。みやこ町の大部分は農地ですが、すべてを農地利用だけに限定するのではなく、幹線道路沿いや商業・工業的に適したエリアについては、土地利用のあり方を見直してもよいのではないかということで、現在、県と協議しながら、土地利用の見直しを進めているところです。この「生活拠点の整備」と「土地利用の見直し」が、ハード部分の大きなストリームです。ソフト面でいいますと、まちづくりは「ひとづくり」と考えてその点に注力しております。

1つは、「まちづくりのプレイヤーを育てること」です。新たなハード整備をしますと、運用も必要です。行政だけでなく、民間で活用してもらいたいと思いますので、そのプレイヤーを育てることが一つ。

そして2つ目は、「教育」です。学校教育は文部科学省のカリキュラムに沿って行われますが、町として独自の教育方針を持つことも重要だと考え、現在、みやこ町独自の「教育大綱」の作成を進めています。その中心テーマになるのが「対話」です。子どもたちは大人をよく観察し、考えていますが、本音を語る場が少ない。そこで、もっと自由に自分の思いを話せる環境を作ることが大切だと考えています。また、社会的・経済的な要請に対応して現場の先生たちが疲弊している現状にも向き合い、そこを共に担い、支えていくことも含めた教育大綱を、今年度完成を目指してつくっています。

3つ目は、「健康寿命の延伸」です。現在、団塊の世代が後期高齢者となり、社会保障費の増大が課題となっています。ただ、それだけに矮小化するのではなく、健康寿命を延ばしていただきたいという思いで、現在は「フレイル予防[19]」に力を入れ始めました。いろいろなところへ視察に伺い、フレイル予防のサポーターの育成に取り組んでいますが、この取り組みの中で気づいたのは、「高齢」という言葉に多くの人がとらわれていることです。高齢、高齢、と言い過ぎて、ちょっとしたことでも「私はもう高齢だから、仕方ない」というマインドセットにとらわれてしまうことが、実際の衰え以上に影響を与えているのではないか。高齢という言葉に騙されてはいけない、「まだまだできることがある」という前向きな意識を持ってもらいたいと考えています。ただ、それは一人では難しい。やはりみんなで励まし合いながらできる、コミュニティづくりや趣味づくりを推進しています。

糸賀　はい、ありがとうございました。今の内田町長のお話では、重点施策を「ハードとソフト」の両面から考え、特にソフト面では「ひとづくり」だということでした。教育大綱づくりに触れられたとき、「まちづくりのプレイヤー」といういい言葉が出ましたね。ここに生涯学習や図書館との接点も見いだせそうです。

内田　おっしゃる通りです。

糸賀　これは、事前に挙げたトピックとも関連してきますので、続けてお伺いしたいと思います。内田町長が強調されている「人材育成」、特に「まちづくりのプレイヤーを増やすこと」や、「対話を重視した教育大綱づくり」などは、とても興味深いと思います。子どもたちの教育環境の整備、そして高齢者や現役世代の生涯学習の推進について、もう少し掘り下げてお話しいただけますか。

まちの人材育成と教育の環境整備

内田　そうですね。先ほどお話しした生活拠点の整備は、なかなか大きい話で時間もかかりますし、ともすれば「行政が勝手にやっている」ということになっていしまいます。ですからみなさんに「自分ごと」として捉えてもらうように持っていきたい。ただ、それが実現するまで指をくわえて待つのではなく、今できることから始めていこうという考えのもと、リーディング事業を起こしています。それは何をしているかというと、居場所づくりです。町民の皆さんから、「気軽に立ち寄れる場所」「地域の人が集まって話ができる場所が欲しい」という声がすごく多いのです。現在、国でもさかんに「居場所」と言っておりますが、実際に居場所がない。かつて、公民館がその役割を担っていたかもしれませんが、今の時代、公民館とはまた違う「新しい居場所」が求められています。みやこ町の図書館に限って言いますと、子どもたちは「静かすぎて嫌」と言うわけですよね。ではもっと気兼ねなくいられるような居場所は何か、というのを、地域の大人や生徒たちを巻き込みなが

みやこ町
みんなのWORKSPACE
（勝山分室内のスペース）

ら、新たな「居場所づくり」を進めています。そうしたときに、使われなくなった公共施設の空間を活用しています。まずは「お金をかけずにDIYでやってみようやないか」ということで、町の職員にも技能達者な職員がおりますので、彼らと一緒に切ったり貼ったりしながら空間を整備してきました。その一例が、かつて勝山地区にあった「図書館」です。合併後のコストカットの流れの中で、「勝山には図書館はいらないのではないか」と言われて、一時は廃止の流れもありました。しかし、それはあんまりだということで、前町長の時に縮冊して図書分室として存続させるという結論になりました。ただ、図書分室として残すことは決まったものの、余ったスペースはどうするんですかという課題がずっと残っておりましたので、今はそこをお菓子を食べてもいい、会話をしてもいいという空間に変え、地域の人々が気軽に集まれる場所にしました。現在、このスペースは週2日、10時～17時に開けて、職員が1名常駐するようにしています。3月の定例会で議案が通れば、そこを本格的に改装していく予定です。

糸賀　ありがとうございました。いろいろなアイデアをお持ちで、その中でも「居場所」がやはりキーワードなんでしょう。最近ですと「サードプレイス（第三の場所）」が必要だと良く言われます。自宅がファーストプレイス、職場や学校がセカンドプレイスに対し、第三の居場所が必要だと。今のお話では現役世代だけでなくて、高齢者やシニア層にとっても、そうした居場所が必要だというお話なんですかね。

内田　図書館の分室は、もちろんどなたでも来ていただいて構いません。ただ、現時点では特に若いお母さんや子どもたち向けの空間としてつくってみています。もちろん、高齢者の方を含め、誰でも自由に利用できる場所ではありますが。

糸賀　それは、公民館でも図書館でもない、違った空間というイメージでしょうか。

内田　おっしゃるとおりです。私としては、そのようなイメージでいます。

糸賀　ありがとうございます。では、松尾町長、お待たせしました。有田町においても、教育や学び直しの環境整備について、さまざまな取り組みをされていると思います。「ひとづくり」の話をいま、内田町長がお話しされましたが、有田町における「ひとづくり」、または教育環

境の整備について、どのようにお考えでしょうか。

松尾　有田町といえばやはり焼き物が中心ですが、私が町長になったとき、人間国宝である十四代今泉今右衛門先生[20]に改めてご挨拶に伺いました。その際に、「町長、やっぱり子どもたちには本物の教育をしてくれ」とご助言というか、アドバイスをいただきました。どういったことかというと、やはり有田には有田焼という、陶磁器の本物がある。さらにそこに、美術や絵画、音楽などの文化に触れさせてくれと。また、スポーツに関しても、プロの野球、サッカー、バレーボール、バスケットボールなど、佐賀県にはプロのチームがございますので、そういうものに触れてもらえればいいと。100人の子どもが本物に触れ、そのうち1人でもそういうことに興味をもってくれる可能性があれば、それが大事じゃないかと。そこで、有田町ではプロスポーツ選手を招いたり、陸上の大迫傑（すぐる）選手による陸上教室も開催しました[21]。

また、有田町のもう一つの特徴として、理数系の考え、固い学問に人の感情にふれる芸術的なものを加えることによる課題解決があります。キチキチっとして動かない問題のアプローチにやわらかい視点を加えることによって、解決への新たな可能性が生まれるのではないかと考えています。

オバマ元大統領が提唱した「STEAM教育」という考え方がありました。これも、理数系ばかりの教育ではなくアートを加えようという考え方です。有田町には「有田工業高校[22]」という県立の実業高校があります。この高校には「セラミック科（旧窯業科）」と「デザイン科」があり、全国でも数少ない特色ある学科を持つ学校として知られています。特にデザイン科は、全国的にも評価が高く、全国から留学生を受け入れているほどです。さらに、有田工業高校の隣には、佐賀大学の「芸術地域デザイン学部[23]」のキャンパスがあります。こうした環境から「アカデミックな町」として人材育成につなげていきたいと考えています。

以前、花井さんとお話しした際、小布施には中学校までしかないため、教育環境の充実に取り組んできたというお話を聞きました。その時、ああやはり有田って恵まれているなと思ったのですが、この環境を活かして素晴らしい人材を作り、巣立った有田のことを振り返ってもらえるようなまちづくりをしたい。そのために、STEAM教育を推進すると同時に、本物の文化・芸術・スポーツに触れる機会をつくる「本物の教育」によって教育長とともに教育行政に取り組んでまいります。

糸賀　STEAM教育というと、Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Arts（芸術）、Mathematics（数学）の頭文字を取ったものですね。

松尾　そうです。私が一番苦手な分野なんですけどね（笑）。

糸賀　なるほど（笑）。そうしますと、学校教育、特に小学校や中学校の教育の中でSTEAMの視点を取り入れているのでしょうか？ それとも、学校教育を終えた一般の成人向けのプログラムとしてSTEAM教育を展開しているのでしょうか？

松尾　小・中・高校生向けの教育です。有田町が「観光の町として頑張っていこう」と考えていた矢先に、コロナ禍によって「もう来ないでください」という状況になりましたよね。そのときに、私はこれまでの常識的な考え方だけではなく、いろいろな考え方・視点が必要だという状況になりました。そのときに、STEAM教育の概念に出会いました。この教育こそが、未来を担う子どもたちに必要なものだと考えました。

糸賀　有田町は、歴史・文化・窯業、さらに、歴史民俗資料館が東西それぞれにありますね。こういった歴史・文化・伝統とSTEAM教育は、どのように融合していくのでしょうか？

松尾　歴史や伝統というと、古臭いっていうかもう守るものというイメージがありますよね。しかし、これは柿右衛門さん[24]や今右衛門さんがよくおっしゃることで、窯業が400年間、ぼーっと伝統を守るだけでは、衰退していったはずなんですよ。だから「挑戦」をしなさい、ということなんですね。ですから新しいことに挑戦してくことを応援する一方で、歴史・文化にふれることで本物の教育をつくっていきたいと思っています。

糸賀　よくわかります。SDGsの視点を取り入れる際にも、STEAM教育はマッチすると思います。あとはそれを学校のカリキュラム、あるいは公民館や図書館といった生涯学習施設の中にどう落とし込み、機能させてるか、という点が課題になってくるだろうと思います。私は慶應義塾大学で文学部に勤めていましたが、もともと理科系の出身なので、理系的な発想やエンジニア的な思考はとても理解できます[25]。町の政策には論理的な思考を持って当たっていかなくてはいけないし、情緒的なアプローチや運動論だけでは、長期的な発展には限界があります。ぜひお二人の町長には、そういった視点を持ってまちづくりを進めていただければと思います。

さて、話題を少し図書館の方に引き寄せていきたいと思います。先ほども、お二人の町長それぞれの町の図書館についての課題や問題点についてお話を伺いました。

今度は、少し視点を変えて、町長ご自身の子どものころからの読書体験や図書館利用の経験について伺いたいと思います。「本を読むことは勉強になる」と考える人は多いですが、一方で、書物を読んでても駄目だ、やっぱり実行力や実践力が伴わないといけないという考え方もあります。まずは、ご自身の読書体験や図書館利用の思い出について、何かエピソードがあれば教えていただけますか？ みやこ町の内田町長、いかがでしょうか？

読書・図書館経験について

内田　はい。このお題をいただいて、幼少期や少年期を振り返ってみました。初めてお小遣いで町の本屋さんで買った本は、『小さなバイキング ビッケ[26]』でしたね。本屋さんで注文して、あれが本当、届くのが待ち遠しかったなという感覚が、思い出されますね。今はAmazonでポチッとすれば届くのですが。その後は、ミヒャエル・エンデの『はてしない物語[27]』でしたかね。

有田町　歴史民俗資料館　左：登り窯模型（有田町歴史民俗資料館）　右：発掘調査で見つかった陶片（有田焼参考館）

さらに中学生の頃には、リチャード・ファインマンという物理学者の『ご冗談でしょう、ファインマンさん[28]』を手に取りました。これが、いよいよ自分がサイエンスの世界に進むんだと決意するきっかけになった本です。

大学時代は、大江健三郎さん[29]がノーベル文学賞を受賞された時期でして、一時、あの独特な文体にしばらくハマったこともありました。『万延元年のフットボール[30]』ですかね、あれを買って読みました。

最近自分が買っている本は、なんというか、ソフトカバーの本が多くて、内容はいいのですが、ハードカバーの、きれいな本も買わないといけないと思います。読むだけでなくて、一枚一枚ページを愛でながらめくったり、挿絵もそうですし。そういう感覚を最近忘れていたな、と、今回のお題をいただいて思い出しました。

最近は、まちづくりに関する本、特に建築や都市計画、ランドスケープデザインに興味がいっていますね。また、仕事柄、政治に携わっていますので、ぐーっと戻っていって、例えば、ローマ時代のキケロの政治思想など、当時の為政者や、それに従ずる人が何を考え、どのような決断をしていたのかなとか、そういうことに興味を持って、今読んでいますね。

図書館の利用についてですが、正直に言うと、あんまり図書館利用は私自身はしていないんです。今はどうしてもAmazon。「Amazon図書館」状態になってしまっています（笑）。ただ、その分、「積ん読」が増え、奥さんには少し迷惑をかけているかもしれませんね。

糸賀　ありがとうございます。やはり紙の本の良さというのか、町長ご自身が語っていらしたのは、本の背を見るだけでも、その内容に思いを巡らせますね。自分のうちの書斎っていうと大げさですけれど、あるいは本棚を見て、背表紙から色々読んで。中には実際に手を伸ばして、その中身を読むっていうことも当然ありますね。電子書籍ではなかなか味わえないのが、こうした紙の本ならではの良さだと思います。ぜひ、町長もたまには図書館に足を運んで、こんな本があるのかと本との出会いを楽しんでいただければと思います。図書館は、そうした出会いを楽しむ居場所、空間にもなりうると思います。

では、松尾町長はいかがでしょうか？ 子どもの頃の読書体験や図書館の利用についてお聞かせください。

松尾　私の読書体験でいうと、うちは3人兄弟だったので、母が十何万円もするような本のセットを買ってくれていました。その中から好きな本を読むという環境で育ったので、割と本には恵まれていた環境だったなと思います。小学校の図書館では、赤い背表紙の、小学校3・4年生向けの伝記シリーズがありましたね。例えばキュリー夫人とか、二宮金次郎、夏目漱石、そうした偉人たちの伝記を3年生から4年生の間にすべて読破しましたね。それも一つの思い出かなっていうのがあります。図書館は好きでしたし、小学校6年生のときは、図書館の掃除の担当でしたから、本棚をずっと磨きながらいろいろな本に触れ、図書館に慣れ親しんでいたような気がします。本は昔から好きで、小説もいろいろと読んできましたが、コロナ禍以降、小説にはあまり手が伸びなくなり、今はまちづくり関連の本など、いろんな本を読んでいます。

こういう仕事をしていますと、いろいろな著名人とお会いでき、そうした方々から本をいただくことも多く、最近は、そうした本を中心に読んでいるというのが、今の私の「図書館」というか読書です。また、今の町長室のすぐ隣、20メートルほどの場所が図書館ですので、通（かよ）って、図書館はいま、どんな人たちに利用されているのか見ております。

糸賀　ありがとうございました。お二方ともや

はり、子どもの頃にいろいろな本を読んでこられたんですね。先ほどの内田町長はミヒャエル・エンデの『はてしない物語』ですし、ファインマンの本に出会ったのはもう少し大きくなってからだと思いますけれども。松尾町長の伝記、赤い背表紙の、あれは偕成社だったでしょうか。私もあの伝記は読みました。外国人の伝記の最初は、たいていトーマス・エジソンや……

松尾　ナイチンゲールだったり。

糸賀　そうそう。そして、日本人の伝記では、最初はだいたい、野口英世さんだとかね。

松尾　そうです、そうです。全制覇するために、右から順番に。

糸賀　そうそう（笑）。やはりそういう、子どもの頃の読書環境というのは大事だと。今の子どもさんは、どうしてもゲームだとか、動画を見たりしている環境なんで。文章というのは直線的、つまり「リニア（linear）[31]」な情報の並び方をしています。内田町長なら、この概念はよくおわかりになるかと思いますが、やっぱり文字、文章を読んで考えるってことで、私たちは物事を順序立てて理解し、論理的に考える訓練をしているわけです。

一方で、タブレット端末の画面では、二次元・三次元的な情報のとらえ方をするわけですから、やはり論理的な思考はなかなか養えないのではないかと思います。文章や数式で理解していくということは、順序を追って考える論理的思考力を養う意味で極めて重要だと思います。また、登場人物の気持ちに成り代わっていき、いろいろな想像をすることは、他の人の立場に立ち、思いやりを育てる意味で非常に重要です。そういう観点からも、子どもたちの読書環境の整備や、図書館の役割はますます重要になってくるのではないでしょうか。

内田　そうですね。先生がおっしゃったように、文章をリニアに読むことで、論理的な思考力を養うとは、私も思っています。

少し話がそれるかもしれませんが、みやこ町の出身者に明治時代の偉人・吉田学軒[32]がいます。彼は昭和の元号を考案し、さらに今の上皇陛下のお名前も付けられた人物です。学軒の兄が健作さんといいまして、日本製麻業の父と呼ばれたエンジニアでした。興味深いのは、この二人の素養が漢学だったということです。彼らの近くに漢学塾があり、全国から2,000～3,000人の生徒が来られていた、っていうことです。その結果、学軒は漢学者となり、健作は理系のエンジニアになったということから、本来的に教育がどうあるべきかということを考えさせられる。リニアに読むことで、ロジカルな物事の考え方が養われていたんじゃないかという仮説を、私も持っています。そう考えると、しっかりと本を読むことに教育効果はあると思います。最近は黙読が主流になっていますが、一番いいのはやっぱり声に出して、自分の声を耳で聞きながら文章を読むことだと思います。私自身、地元の方々と10年以上読書会を続けていますが、読めていないと感じることがあります。読んでいるようで読めていない。だからこそ、時々は声に出して読むことは非常に重要だなと、日頃感じています。

糸賀　やはり、文章をリニアに、線形に並んだ順番で読んでいって、今度は自分が読んで感じ

吉田学軒

吉田健作

たことを、やはり言葉に出して表現してみることが重要ですね。言葉そのものも実は線形に並んでいるわけですからね。ところが、画面で情報を見ると、いっぺんに様子が具体的に見えてしまいますね。それを頭の中で論理的に整理して、言葉に出して表現し、他の人とコミュニケーションをすることは、大事な知的トレーニングです。子どもの時代から、学校教育や、図書館をはじめとした社会教育施設でもいいので、そういうトレーニングの場を増やしていく。そうした環境整備は重要だと思います。では、松尾町長、いかがでしょうか？

松尾　有田町の伝統として、小学校や中学校でも図書館の利用は比較的多いですね。特に、東図書館は子どもたちや親の集合場所として機能しているので、それを大切にしていければと思っています。また、先ほど電子書籍の話が出ましたが、私も試しにAudibleなどを利用してみましたが、どうも心に残らないし、頭にも残らないというのが感想です。やはり、読書は紙の本がいいと感じます。

少し話がそれるかもしれませんが、新聞は見開きで、こう開きますね。見たい情報だけをみようとしても、そこに他の記事があったりして、情報が豊かになるじゃないですか。電子版の新聞では、自分で必要な情報だけを検索できるので、こうした遊び、遊びというか余白がありません。これは紙の新聞ならではの醍醐味だと思います。また、私は卒業式の際に「人・本・旅」という餞（はなむけ）の言葉を贈るようにしています。本は多くの喜びや悲しみの疑似体験をさせてくれるものだと思いますから、子どもたちには「できるだけ多くの本を読んでほしい」と、教育長を通じて各学校にも伝えてもらっている、重要なことの一つです。私は、子どもたちがたくさんの本を読んでいれば、社会に出た後はやっていけるんじゃないかなと思っていますので、できるだけ多くの本を読む機会を増やせるような教育環境の整備と充実を進めています。

糸賀　わかりました。ありがとうございます。

途中でお話に出た新聞の話ですが、最近は紙の新聞を定期購読している家庭がどんどん減っていますよね。しかし、新聞の紙面というのは、松尾町長がおっしゃったとおりなんですよ。読もうとしていた記事の他にも、周辺にいろいろとあって、「あっ、こんなこともあるんだ」と自分が当初興味がなかったことを思わず読みふけってしまう――こうした偶然には、専門的な用語がちゃんとありましてね、「セレンディピティ（serendipity）[33]」といいます。

松尾　そうなんですね。

糸賀　実は、思いもよらない発見とか出会いっていうのは、そうした周りの記事から生まれてくるわけです。他にも、もう今なかなか分厚い百科事典って見ないんですけれども、五十音順に並んでる百科事典では、自分が調べる項目の前後に全然違う言葉の解説が書かれています。本来は読もうと思ったところじゃないところを読みふけっちゃうっていうのが醍醐味なんですよ。子どもの頃の読書を通じてそういうものから視野を広げていくっていうことは大事な機会だろうと思います。

では、身近な地域の図書館に話を進めますが、有田町の場合、老朽化の問題や、西図書館の使い勝手の課題があります。さらにどの自治体でも経費負担やコスト削減が求められますが、内田町長が「これまではコストカットばかりだったが、もう少し前向きに考えるべきではないか」とお話もされてきました。

もう一つ大切なのは、図書館の職員配置の問題です。一応、司書は専門職とされていますが、長年司書の養成に携わってきた私から見ても、現在の司書の教育が十分かと言われると、決してそうではありません。そこで、お二人の町長

にお聞きしたいのは、今後の図書館の方向性や人材育成についてです。近い将来、わが町の人材育成や図書館をどういう方向にもっていくのかということについて、何かご質問でもいいですし、ご自分が描いている構想などでも、お話しいただきたいと思います。まずは、松尾町長からお願いします。

まちの図書館についての展望

松尾　有田町は、旧2町が合併したため、公共施設が似た規模のものがそれぞれの地区にある状態です。図書館もその象徴的な例の一つですね。このたび、まだ議会の承認を得ている段階ですが、中学校2校の統合を進めています。現在ある2つの中学校を統合し、新しい中学校を建設する予定です。その際に、統合中学校の隣に新しい図書館を設置し、学校図書館と公共図書館を一体化させた施設をつくる構想を教育長と話し合っています。静かな図書館ももちろん必要だと思いますが、それだけでなく、にぎわいのある図書館、つまり町民の交流の場や学びの場になればいいなと考えています。

できれば2階建てにつくり、公園の中に作ろうと思っていますので、1階部分は子どもや子育て世帯が気軽に利用できるスペースにする計画です。例えば、キッチンスペースなどを設けて、休日には軽食を食べられるようなところも作りたいです。一方で、2階部分には大人や学生が集中して学べるスペースを確保して、図書館の基本機能に加えて、公共的な機能を持たせていきたいと思っております。

経費が課題になりますが、学校図書館に公共図書館を併設することで、経費の削減にもなりますし、相乗効果が期待できると考えています。運営に関しては、残念ながら現在はアウトソーシングで運営を行っています。今のところ、非常に優秀な方々に支えられているので、今後も同じように運営を続けていければと考えています。図書館のコンセプトや我々の思いなど、いろいろなことを相談しながらにはなりますが、このように新しい図書館は複合的な施設にしていきたいと考えています。

糸賀　なるほど。学校図書館と公共図書館を併設するというアイデアは全国的にも事例が見られますね。ただ、私が知る限り、必ずしもすべてがうまくいっているとは限りません。やはり学校側は当然、生徒の安全確保に配慮しますので、公共図書館を利用する外部の人間とは利用時間を分ける必要があります。たとえば基本は公立図書館でありながら、放課後に生徒が利用する、あるいは週末に公共図書館として一般利用できるようにするなどの工夫がされています。また、国語科や社会科の授業のときに、1コマ

有田町　現在の図書館　左：有田町立東図書館　右：有田町立西図書館

図書館に行って授業をする、といった運用が多いですね。

有田町の場合、西図書館と東図書館はいずれ統合するような形で、より使い勝手の良い図書館づくりを進めることが必要そうですね。ぜひ、前向きにご検討ください。

松尾　はい、ありがとうございます。ぜひ参考にさせていただきます。教育長とも共有しながら、慎重に検討していきたいと思います。

糸賀　では、次に内田町長に、みやこ町の図書館の今後の方向性についてお話しください。

内田　まだ確たる計画はなく、そこまで手が回っていないというのが正直なところです。しかし、やらなければならない方向性としては、我が町においての図書館がなんなのか、というところの再定義を行わなければ、次のステップに進むことは難しいのではないかと。これは、まず最初に取り組むべき課題だと考えています。

それから、みやこ町の中央図書館が、糸賀先生にもお越しいただいた豊津地区にある図書館なのですが、隣に博物館があります。またさらにそのすぐそばに、今後文化交流センターという新しい公民館機能を持った建物ができます。これらの3つの施設の連携が重要なポイントになると考えています。例えば、図書館の蔵書の中には、どこにでもある一般的な書籍と、みやこ町の独自の資料の両方が含まれています。後者に関しては、そういうものをわざわざ求めて来られる方もある。そうすると、たとえばその裏の博物館で実物が見られたり、研究調査に来られたかたがゆっくりできる場所として文化交流センターを使ったらどうかとか。さらに、実はその近くに県立の旧藩校の中高一貫校「育徳館高校」があります。その生徒が気軽に訪れ、勉強したり調べ物をしたりできる環境を整備することも、大きな可能性の一つだと感じています。つまり、単なる「本を貸し出す場所」としての図書館ではなく、周囲の施設との有機的な連携を測らなければならないと、今のところ考えています。これは、現在進めている町のグランドデザインの一環として考えているところですので、まずはそこの仕組みづくりをした上で進めていきたいと考えています。

糸賀　今、「図書館の再定義」という言葉が出ましたね。これは非常に重要な視点だと思います。また、先ほど内田町長のお子さんが、「図書館は静かすぎる」とか、「ちょっと居づらい」とおっしゃっていたという話がありましたが、最近は喋ってよい、お話をしていい図書館がずいぶん増えました。さらに、以前は本を濡らしてしまう可能性があるんで絶対に飲み物は持ち込んではいけないということでしたけれど、今は蓋がついていればだいたい持ち込み自由と変わってきてもいます。ですから、みやこの図書館は、私は建築的にはなかなか優れていると思いますので、あの建物をうまく活用するだけでも、町長が言われるような「居場所づくり」や、じっくりと物事を考えたり、町民同士が交流できるのではないでしょうか。今の図書館の中にも、みやこ町の将来を考える人材の育成を実現する条件は、すでにそろっていると思います。

内田　先生、すみません。一点言い忘れていましたが、図書館までどうやって行くのかという公共交通の問題があって、これは非常に大きな課題です。

糸賀　それは、よくわかります。私も先週、みやこ町に行ったとき、行橋から平成筑豊鉄道で新豊津駅まで行きました。それで、新豊津駅から豊津の図書館まで歩きましたが、みやこ町の町の様子がよくわかりました。畑や田んぼが多くて、歩いている人はそんなにいません。一方で、車はものすごいスピードで走っていく。そ

の中を歩いて図書館まで向かったので、館長さんたちに「よく歩いて来ましたね」と驚かれましたよ（笑）。

確かに、公共交通の問題を考えなければいけませんね。ですから、いろいろ条件を整えても、町民の方々がきちんとアクセスできる環境も用意しなければいけない。都市部の図書館のようにはいかないことも理解しております。いずれにしても、これからの図書館が町民の「ひとづくり」につながるという点は、お二人の町長にぜひご理解いただきたいと思います。学校は、小学校は6年間、中学校は3年間で卒業してしまいますが、図書館には卒業がありません。ですから、町民の方々が長く使ったり、さらに、移住を検討する人たちにとっても、図書館がどう充実しているかが移住の一つの条件になっています。特に都市部から移住を考えている方々は皆さんそうおっしゃるんですよね。知的環境や情報資源を整備するということが、人口減少を食い止める一つの手立てにもなるだろうと思います。改めて、今日のお話を通じて、松尾町長はどのように感じられましたか？

人口減少と教育による魅力あるまちづくり

松尾　そうですね。今、内田町長からも公共交通の課題が出ましたが、有田町で現在計画している中学校と公共図書館の併設案は、その地域交通もクリアしており、防災の観点からもよく、町のほぼ中心に位置することなど、いくつかのメリットがあります。高台にあり、少し辺鄙なところではあるのですが、焔（ほのお）の博記念堂というランドマークもあり、公園として町民からも親しまれています。先ほどのお話で「学校図書館と公共図書館の共存は難しい面もある」という指摘もありましたので。その点をしっかりと吟味しながら、進めていきたいと思います。私自身も、図書館は町の指標だと思っています。図書館の充実が、移住の基準になるということも

みやこ町立図書館 本館（みやこ町 豊津地区）

聞いていますから、いろいろな図書館の未来を想像しながら、有田町に合う図書館をつくっていきたいです。

糸賀　中学校との併設が絶対に難しいというわけではありません。生徒さんの安全面、また蔵書構成も中学校の調べ学習と一般の方では自ずと異なってきます。こうした点が配慮できれば、施設の共同利用によるコスト削減、相互交流による学びの促進などいいことがあるんじゃないかと思います。有田の場合、伊万里市と武雄市という、本当に両極端のような図書館がお隣にありますから、「第三の道」というか、一味違う図書館をお考えになったらどうでしょうか。

松尾　あの、実は、教育長とも「打倒、伊万里・武雄」ということで、考えています（笑）。批判的にとらえているわけじゃないのです。ポジティブな競争意識として、両市の図書館に負けないような、有田らしい図書館をつくりたいですね。何か面白い仕掛けができないかと語り合っています。今後もぜひ、ご相談に乗っていただければと思います。

糸賀　もちろんです。有田焼の町ならではの、有田焼でいっぱいの図書館みたいなものも考えてみたらと思っておりますので。楽しみにしています。

内田町長、新しい図書館づくりについて、今の施設を活かしながら、分室も含めて何か新しいコンセプトでの方向性をお考えでしたらお話しいただけますか？

内田　そうですね、やはり「居場所」というのがキーワードになるでしょうね。話せる図書館を作りたいとは思いますが、静かに本を読みたい方もいらっしゃるでしょうから、そのあたりはすみ分けが必要かなと思います。それから、町内に本屋さんがないので、本屋がないことを踏まえた上で、図書館がどのような役割を果たすべきかを明確にしていきたい。本当は本屋が欲しいのですが。私はあまり図書館には行けていませんが、出張のときに本屋さんで本との出会いを求めているんじゃないかなと思うのですが。まさに先ほど出た「セレンディピティ」の話ですね。それが町内でできれば一番いいですね。

町民には、本を読む方々が多いんですけれども、終活の一環としての本の整理も課題になっています。これは大学の先生方もそうですが、蔵書を今後どうするんだ、という話を時々伺います。古書の中には素晴らしい本がたくさんあって、特に専門書は高価で今では買えないものも多く、簡単に手放すのはもったいない。そこで、図書館が寄贈を受け入れたり、再利用する仕組みを作ることも一案かもしれません。私も大学の図書館でよく勉強しましたが、図書館はやはり大学の「肝」だと思いますので、そういった蔵書を引き受ければ、それはみやこ町に「大学」ができるようなものだと考えています。そういった充実が、図書館の役割の一つとしてあってもいいのではということも、いまは思っています。

糸賀　確かに、終活の一環として、古い本を図書館や地域に寄贈するという仕組みは考えられますね。もちろん、図書館側で選書の基準を設ける必要がありますが、そのようにして住民との距離を縮めるということは十分考えられるだろうと思います。

最後にご紹介したいのですが、地域とのつながりを深めるために、図書館でワークショップを開催するというのも一案です。テーマは図書館関連でなくていいんです。例えば、人口減少への対応、地域交通の整備、産業振興といった地域のテーマでワークショップを図書館でしますと、いろいろとメリットがあります。というのも、図書館には行政資料や地域のデータが

奈良県生駒市立図書館で行われたワークショップ

揃っていますから、それらを活用しながら議論できるのです。

これは、奈良県生駒市の図書館で開催されたワークショップです（写真）。「生駒市の人口を増やすためにどうしたらいいか」をテーマに、3回にわたって議論を重ねました。ここの市長さんがまた、図書館に大変熱心なんですよ。また、図書館の利用者の方々は本を読む習慣があるので、大変論理的に考えてくださいました。最後にはそれぞれのグループでまとまった意見をプレゼンテーションする。当然そのときには市長さんも副市長さんも来て、聞いて、最後に市長賞を出しました。このような取り組みは、図書館を単なる本の貸し出し施設から、町の未来を考える場へと進化させる可能性を秘めています。こうしたワークショップの開催も、今後の参考にしていただければと思います。

さて、最後にお二人の町長同士で、「これはぜひ聞いてみたい」ということがあれば、お話しいただけますか？

その他

松尾　そういうことを考えていなかったので（笑）。でも、内田町長とはちょくちょくお会いできるので、今度ゆっくりみやこ町に行きます。その際にまたよろしくお願いします。

内田　よろしくお願いします。私の方も、ここでは語り尽くせないと思うんですが（笑）。あえて一点、イノシシやシカの被害についてはどうされていますか？

松尾　うちもイノシシの被害はひどいですね。シカはまだそこまでではないのですが、本当に厄介な問題です。昨日も猟友会の方々と話をしたばかりです。

内田　うちはイノシシもシカも両方被害が大きくて。どう対策すべきか、逆に住民の方々に聞いているような状態です（笑）。

松尾　本当に、こういうリアルな問題こそ重要なんですよね（笑）。内田町長とはまた別の機会にじっくり話しましょう。

糸賀　イノシシやシカの被害に関する対策も、

図書館を活用したワークショップのテーマになり得ると思います。全国各地でどのような対策が取られているのか、新聞や専門誌の記事を集め、地域住民と一緒に議論するのも良い方法ですね。それでは、そろそろお時間となります。何か言い残したことがあれば、どうぞ。

内田　一点、アドバイスをいただきたいのですが、図書館や学校の図書室で「漫画」をどのように扱うべきかについて、先生のご意見を伺いたいです。

糸賀　今や子どもたちは当然漫画を読みますし、私だって子どもの頃は『おそ松くん』や『オバケのQ太郎』を読んでいました（笑）。でね、これは図書館の職員の方々がしっかりと選書をし、お金をかけてそういう漫画を入れても十分役に立つと考えるのであれば、差し支えないと思います。さらに子どもたちが、次はこの漫画もと次々リクエストしてきたときに、そこまでは買えないことの説明責任が果たせるのであれば、一定量の漫画は入れても構わないと考えます。それによってむしろ図書館に親しみをもってもらえるのであれば、導入の仕方としては十分考えられるでしょう。ただし、いつまでも漫画ばっかり読んでいられても困るので、次はもう少し活字の多い本に進めていくんでしょうね。

内田　なるほど。ありがとうございます。

糸賀　では、そろそろ時間となりました。来週から3月議会が始まると思いますが、お忙しい中、貴重なお時間をいただき、本当にありがとうございました。とても有意義な鼎談になりました。

松尾・内田　こちらこそ、ありがとうございました。

編集部注

1　文部科学省の中央教育審議会（中教審）は、日本の教育政策全般に関する重要事項を調査・審議する機関であり、その下に複数の分科会が設置されている。その中の一つである生涯学習分科会は、生涯学習や社会教育の振興方策について専門的に調査・審議を行っている。
参考：生涯学習分科会：文部科学省
https://www.jla.or.jp/committees/nintei/tabid/446/Default.aspx

2　認定司書制度は、図書館司書の専門性向上を目的とした制度。公益社団法人日本図書館協会の事業で2010年より開始された。司書資格を持つ者が、実務経験や研修を通じて高度な知識・技能を習得し、一定の基準を満たすことで認定される。認定を受けることで、専門職としての能力が証明され、キャリアアップや職務の幅が広がる可能性がある。
糸賀雅児「キャリアデザインから読み解く認定司書」『Cul De La』vol.6、日本カルチャーデザイン研究所、2023年
参考：認定司書への道（日本図書館協会）
https://www.jla.or.jp/committees/nintei/tabid/446/Default.aspx

3　『Cul De La』vol.6、日本カルチャーデザイン研究所、2023年

4　全国若手町村長会は、49歳以下で当選した町村長が地域課題の解決や地方自治の活性化を目的に設立した組織。会員同士が情報交換を行い、政策研究や勉強会を通じて地域の発展に貢献している。定期的な総会やオンライン勉強会を開催し、実践的な施策の共有を進めている。
参考：全国若手町村長会
https://www.young-mayor.net/

5　長野県上高井郡小布施町にある町立図書館。2009年9月開館。「まちじゅう図書館」などの取り組みが評価され、2011年にLibrary of the Yearを受賞した。初代館長・花井裕一郎。

6　武雄市図書館（佐賀県）は、民間企業のカルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社と連携し、官民一体の運営モデルを採用したことで注目を集める。2013年にリニューアルし、カフェ併設や書店機能を併設した蔦屋書店のスタイルを取り入れた。来館者数の増加や賑わい創出の成功例として高評価を受ける一方、公立図書館の役割との兼ね合いや運営費の問題が議論されている。
〒843-0022 佐賀県武雄市大字武雄5304-1
TEL　0954-20-0222
参考：武雄市図書館
https://takeo.city-library.jp/

7　伊万里市民図書館は、佐賀県伊万里市の公共図書館。市民参加型の運営を特徴とし、1997年の開館以来、「図書館フレンズ」などの市民団体の活動を積極的に取り入れ、ボランティアが運営に関与する仕組みを確立。イベントや講座の開催を通じて、生涯学習の拠点としても活用されている。ブックスタート事業や家読（うちどく）による子供の読書推進活動も実践している。
〒848-0027　佐賀県伊万里市立花町4110-1
TEL　0955-23-4646
参考：伊万里市民図書館
https://www.library.city.imari.saga.jp/

8　過疎地域は2022年度に885市町村となり、1970年の制度開始以来初めて全国1718市町村の半数を超えた。

9　松下電器産業（現・パナソニック）創業者の松下幸之助が1980年に設立した私塾。日本の政治・経済・社会のリーダーを育成することを目的とする。
政治家志望者、企業経営者やNPO関係者などが所属し、政治・経済・経営・社会問題に関する講義や国内外の政策研究・実践などを行っている。卒塾生には、多くの政治家や経営者がおり、特に国会議員や地方自治体の首長を務める者が多く、日本の政界に一定の影響力を持つ。

10　将来的に人口減少や少子高齢化により存続が危ぶまれる自治体を指す。日本創成会議（日本が直面する人口減少問題や地方の衰退に対し、具体的な政策提言を行うことを目的とした民間団体）による定義では、20〜39歳の女性人口が2010年比で2040年までに50%以上減少する市区町村を「消滅可能性都市」とする。2014年の時点で、日本全国の約50%の自治体が「消滅可能性都市」とされた。過疎地域だけでなく、都市部の一部や地方の中核都市の周辺部にも影響が広がっている。

11　九州地方の主要な陸路は鉄道は鹿児島本線（門司港〜鹿児島、博多・熊本などを経由）、日豊本線（小倉〜鹿児島、大分・宮崎などを経由）、道路交通は九州自動車道（門司〜鹿児島、熊本方面を経由。1979年開通）、東九州自動車道（小倉〜鹿児島、宮崎方面を経由。1999年開通）など。
2011年に九州新幹線（博多〜鹿児島中央、熊本などを経由）が全面開業して以降、福岡 〜 鹿児島間の移動時間は大幅に短縮された一方、東側は一部急行が廃止されるなどの影響もあり、九州の“東西格差”が広がったという意見もある。
参考：『九州鉄道網　東西格差 「時間地図」分析』読売新聞全国版、2022年10月22日、27面

12　畿内・太宰府へのアクセスの拠点であったみやこ町には、古代文化の遺物や豊前国府時代の史料が多く残されている。みやこ町歴史民俗博物館は、これらの史料や旧小倉藩主・小笠原家の旧蔵した古文書、みやこ町ゆかりの人物に関わる資料などの保存・研究を行っている。
〒824-0892　福岡県京都郡みやこ町勝山上田960
TEL　0930-33-4666
参考：みやこ町歴史民俗博物館
https://www.town.miyako.lg.jp/rekisiminnzoku/kankou/spot/hakubutukan.html

13　有田町の歴史民俗資料館は東館（有田町による設立）と西館（西有田町による設立）の2館がある。現在は東館のみが開室し、有田焼の歴史にまつわる道具類、文書類を中心に展示している。併設の有田焼参考館では、窯跡などから出土した陶片を展示し、それらの保存・研究も進めている。
〒844-0001　佐賀県西松浦郡有田町泉山1-4-1
参考：有田町歴史民俗資料館
https://www.town.arita.lg.jp/rekishi/

14　小宮豊隆（こみや・とよたか　1884−1966）は、日本のドイツ文学者、評論家。特に夏目漱石の弟子として知られる。東京帝国大学でドイツ文学を学び、新潟高等学校教授などを歴任。漱石の死後、その作品の編纂や研究に尽力し、『漱石全集』の編纂を主導した。また、ゲーテ研究でも知られ、翻訳や評論活動を行った。教育者としても多くの後進を育成し、日本の近代文学研究に大きく貢献した。

15　Science（科学） Technology（技術） Engineering（工学・ものづくり） Art（芸術・デザイン） Mathematics（数学）の頭文字を取った略語。複数の分野が相互に関連しながら、より実践的で意味のある知識の習得を目指す教育。単に知識を持つだけでなく「課題を自ら発見し、解決策を創出できる能力」の育成に重点を置く。教科書に書かれた知識の暗記だけではなく、子どもたちが自発的に問題を見つけ、それに対する解決策を考え、試行錯誤する過程を重視する。このアプローチは「アクティブラーニング（能動的学習）」と呼ばれる。

16　ウェルビーイング（Well-being）は、well（よい）とbeing（状態）からなる言葉。世界保健機関（WHO）は、ウェルビーイングを身体的・精神的・社会的に良好な状態を指すとする。健康と同じように日常生活の一要素であり、社会的、経済的、環境的な状況によって決定される。

17　ESG経営とは、目先の利益にとらわれず、環境（Environment）・社会（Society）・ガバナンス（Governance）の3つの要素を重視する経営方法、概念を表す言葉。企業が長期的な成長を目指すために、環境負荷の低減、社会的責任の遂行、適切なガバナンス体制の確立を重視する。それぞれの要素には、次のようなものが一例として含まれる。

・環境――二酸化炭素排出量の削減、再生可能エネルギーの使用など
・社会――適切な労働条件・労働環境の整備、ダイバーシティの推進など
・ガバナンス――適切な情報開示、コーポレートガバナンスの整備など

18　馬奈木俊介（まなぎ・しゅんすけ）日本の経済学者・都市工学者。九州大学工学研究院 環境社会部門 教授・都市研究センター（併任）。高齢化、人口減少、エネルギーの枯渇、環境汚染、健康・福祉、教育、災害など都市が直面する多岐に渡る複雑な問題に対して都市工学・経済学など多面的かつ学際的なアプローチ方法から理論的、実証的な研究を行っている。また、現実的かつ効果的な政策提言多数。
参考：研究者詳細―馬奈木 俊介
https://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/html/100020453_ja.html

19　フレイルは筋肉の衰え、運動器の障がいによる移動機能の低下などを指す「身体的フレイル」、うつ傾向や意欲の低下を指す「精神・心理的フレイル」、社会とのつながりの希薄化や独居、経済的困難をいう「社会的フレイル」の３つに大別できる。これらのフレイルが連鎖していくことで、老いが急速に進む一方、予防に取り組むことでその進行を緩やかにすることもできる。

20　今泉今右衛門（いまいずみ・いまえもん）は鍋島藩の御用赤絵師に始まり、現代まで有田焼の色鍋島の技法を一子相伝で伝える名跡。十四代今泉今右衛門は、武蔵野美術大学工芸工業デザイン科卒業後、福岡、京都で修業し、十三代のもとで家業に従事した。日本伝統工芸展工芸 会長賞など数々の賞を受賞し、現在、日本伝統工芸会 正会員（理事）、2014 年、色絵磁器において陶芸家としては最年少で人間国宝となった。

21　大迫傑（おおさこ・すぐる）陸上競技（長距離・マラソン）選手。2021年に開催された東京オリンピックで6位に入賞した。有田町では小中学生を対象に、大迫選手を講師としたマラソン教室が2022年6月25日に開かれた。

22　1881年（明治14年）日本初の陶磁器産業技術者養成機関として設立された「勉脩学舎」（べんしゅうがくしゃ）を源流とする。陶磁器産業技術者の育成を目的としており、九州で唯一のセラミック科を擁する。地域との連携を重視し、有田陶器市などの地元イベントにも積極的に参加している。さらに、全国募集（地域みらい留学）を実施しており、県外からの生徒も受け入れている。
〒844-0012　佐賀県西松浦郡有田町桑古場乙2902
参考：佐賀県立有田工業高等学校（全日制）公式サイト
https://www.education.saga.jp/hp/aritakougyoukoukou/

23　芸術を通じて地域創生に貢献する人材の育成を目的として、2016年に設立された。人文科学、社会科学、自然科学の各分野を総合的に学びつつ、芸術表現や芸術マネジメント（芸術的な視点で、人、モノ、情報をまとめていく手法）を学ぶ。
〒840-8502　佐賀県佐賀市本庄町1番地
参考：芸術地域デザイン学部（国立大学法人佐賀大学）
https://www.saga-u.ac.jp/school/geizyutu/

24　酒井田柿右衛門（さかいだ・かきえもん）有田の陶芸家が襲名する名跡。初代柿右衛門は1640年代に日本で初めて赤絵磁器の焼成に成功した人物。柿右衛門様式は濁手（にごしで）と呼ばれる乳白色の素地に赤の釉薬を余白を生かして組み合わせた、絵画的な構図が特徴である。18世紀になると海外にも盛んに輸出され、西洋にも影響を与えた。現在は十五代柿右衛門へと継承されている。
参考：柿右衛門窯（公式ホームページ）
https://kakiemon.co.jp/

25　糸賀氏の経歴については、以下の記事も参照。
糸賀雅児、高橋俊也「糸賀先生に聞く図書館政策オーラルヒストリー――大相撲と宮沢賢治と図書館と」『Cul De La』vol.5、日本カルチャーデザイン研究所、2022年、pp.11-46

26　スウェーデン出身の作家・ジャーナリストであるルーネル・ヨンソン原作による児童文学シリーズ。臆病で強いわけでもないバイキングの主人公・ビッケが、その知恵を使って友人や大人を助ける物語シリーズ。

27　*"Die unendliche Geschichte"*（『はてしない物語』）は、ドイツの作家ミヒャエル・エンデによる、児童向けファンタジー小説である。本に描かれた世界「ファンタージエン」の中に入り込んだ主人公が、その世界の崩壊を救う物語。本の中と外の世界が交差する構造が特徴的で、多くの言語に翻訳されている。

28　リチャード・ファインマン（Richard Phillips Feynman、1918−1988）はアメリカの理論物理学者であり、経路積分や、素粒子の反応を図式化した「ファインマン・ダイアグラム」の発案で知られる。量子電磁力学（QED）の発展に貢献し、1965年にノーベル物理学賞を受賞した。彼は物理学の教育や普及にも熱心で、そのユーモラスな性格と型破りな思考法で知られている。*"Surely You're Joking, Mr. Feynman! : Adventures of a Curious Character"*（『ご冗談でしょう、ファインマンさん』）は、ファインマンの人生に起きた様々な出来事についての回顧録である。

29　大江健三郎（おおえ・けんざぶろう　1935−2023）は、戦後日本を代表する作家であり、1994年に日本人で2人目のノーベル文学賞を受賞した。受賞を機に日本国内で大きな注目を集め、著作の再評価やブームが起こった。1967年には、代表作とされる『万延元年のフットボール』により歴代最年少で谷崎潤一郎賞を受賞した。核兵器や天皇制などの社会的・政治的な問題、知的な障がいをもつ長男（作曲家の大江光）との共生、故郷である四国の森のなかの谷間の村の歴史や伝承といった主題を重ね合わせた作品世界を作り上げた。

30　『万延元年のフットボール』（1967年）は、大江健三郎の代表作の一つで、歴史と現代の交錯を描いた象徴的な作品である。主人公の青年は、障がいを持つ兄と共に故郷の村へ戻るが、そこで仲間たちとフットボール（サッカー）を通じて社会に対する抵抗を試みる。第3回谷崎潤一郎賞受賞作品。

31　直線的、一直線の、線形のといった意味を持つ英単語だが、数学や物理学などの分野では、線形の関係や性質を持つものを指すことが多い。たとえば、離散的なものに対応する連続的なものとして電子回路を区別する（リニア電子回路）場合や、コンピューターによる非直接的な映像編集方式（ノンリニア編集）に対するテープを利用した編集方式（リニア編集）などに使われる。

32　吉田学軒（吉田増蔵）（よしだ・がっけん　1866–1941）みやこ町出身の漢学者。村上仏山(村上彦左衛門)の漢学塾・水哉園で学び、その後、英語を学ぶためにアメリカに渡った。宮内省に勤めているとき、上司として森鷗外と知り合った。森との親交は非常に深く、森の和漢の蔵書を吉田に譲り渡すよう遺言したほどであった。吉田は森の元号研究を引き継ぎ、大正天皇の崩御の際、吉田が考案した「昭和」の元号案が採用された。

33　偶然に思いがけない幸運な発見をする能力。たとえば、失敗した実験の結果から予想外の有用なデータや知識を得たり、当初の目的とは異なる価値のある情報を発見したりできる能力。